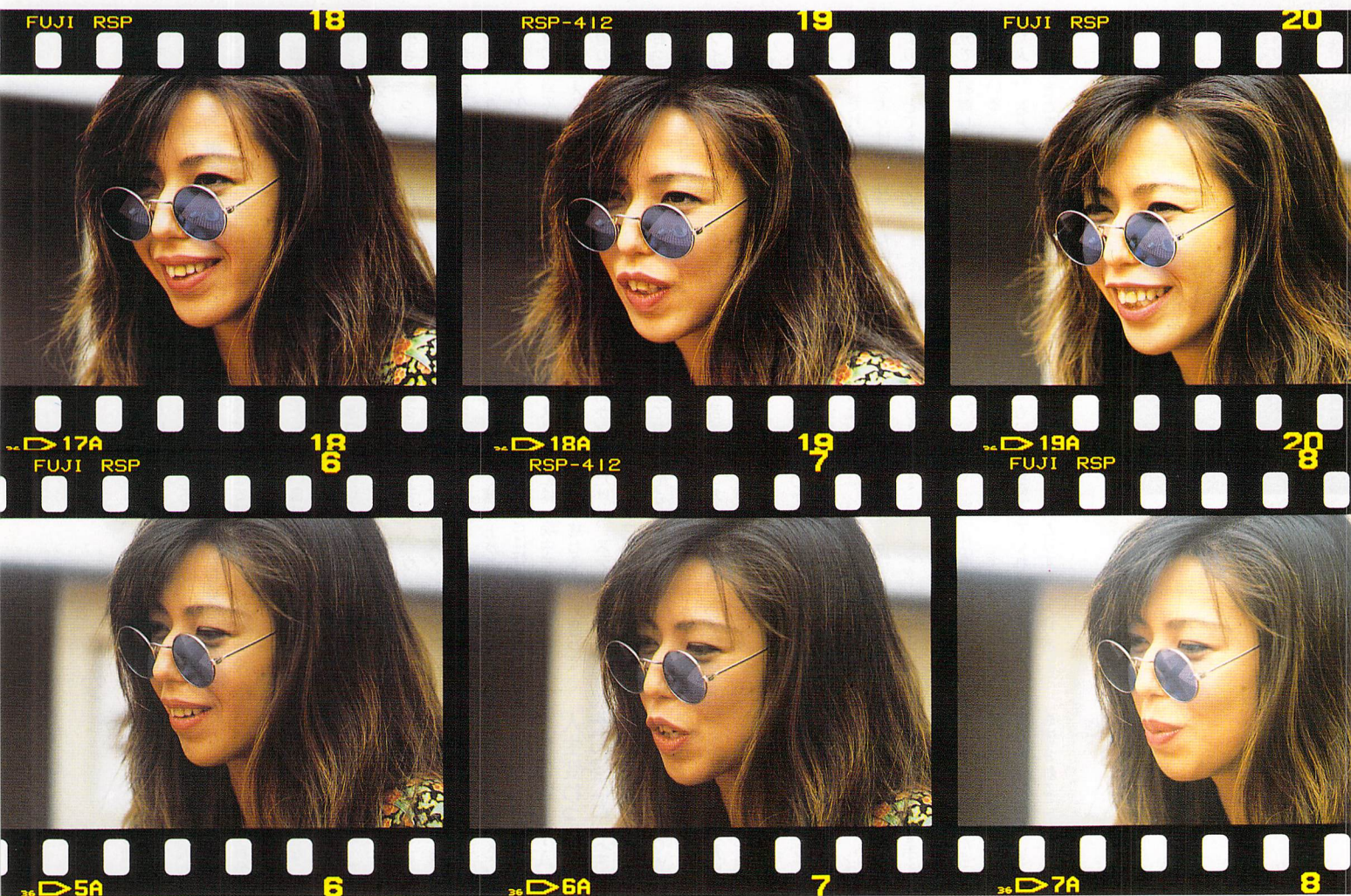


# The Real Face

SPECIAL INTERVIEW

## 寺田恵子 インタビュー



ジャニス・ジヨプリン、  
ベット・ミドラー、  
カルメン・マキ…。女でありなが  
ら、女を捨てたところで  
活動して、  
それでもなお、女であり続けた  
人たちの系譜を、  
次の世代へ私が伝えていきたい。

取材・文／大音美弥子  
カメラ／ハリイ中西  
協力／BMGビクター、心斎橋ミュージズホール





豪雨で遅れた新幹線のため、予定よりすこし遅れて現われた彼女は、思いのほか小柄だった。

「何をしても、肉がつかなくて」と本人は嫌がるが、黒のヘルボトムに包まれた脚ときたら、まさに少女マンガのように細く、すらりとしている。この華奢な女性が、80年代後半の日本を代表したロックカーナののだ。

「人に会うと、いつも『思ってたよりも小さい』って言われるけど、フツーだよな(笑)」

寺田恵子とフツー。これは似合わない。が、ふだん小柄で目立たないくせに(寺田さんは美人だから目立たないというの当てはまらないが)、ステージで大きく見えるというのは、舞台人として必須の要素なのかもしれない。ミック・ジャガーだって歌わなけりゃ、ちっちゃなおっちゃんだ。

目の前の寺田恵子は、自分のなかのワイルドさとセンチタイプさとのギャップに、とまどっているように見える。

『ハード・ロッカー』派手で強くてギラギラの、女を捨てた豹柄女』VS『ブルース・レディ』ひとりであるのは淋しいけれど、だれかと別れて余計にさびしさがつるよりはひとりだけでいたほうがむしろよの女』とでも言おうか。

だれでもそうだが、人間のなかには自分でも制御しきれない野獣が何匹か住みつけている。それを飼ひ馴らしてしまつた人が、おとなと呼ばれるのだろうか。その鎖をときどき外してやることでロック

クが生まれるならば、いつ暴れだすかわからない獣の存在はフツーの人以上に怖くて当たり前だろう。

「音楽をやっていると、自分自身でいながら自分でなくなる瞬間っていうのがあるの」と、彼女は言う。

ふだん、弱い自分を他人に見せるのがイヤで強がって(そのせいで、損をした)、傷ついたりして)ばかりいる少女は、そのとき自分を越えた存在になる。人前で話すことすら苦手で、ヴォーカルの立場上バンドのスポークスマンを務めることさえ実のところ重荷だった、ナイーヴな彼女が大きく燃え上がる瞬間だ。

「ステージも、ほんと好きじゃないのね。スタジオでは一晩中でも歌ってられるし、他の人がもう終わろうって言うても聞かないんだけど、ステージの前はいつもナーヴァスになってしまつて。何から何までお膳立てされちゃって『さあ、どうぞぞ』って用意されたシチュエーションが苦手なの。どうして、今ここで歌わなくちゃならないの?とか思っちゃうんだ」

人前に出るのが嫌い、というわけでもない。公園の片隅で、誰に頼まれたわけでもなく歌いだし、気がついたら人だかりがして…そんな状況にあこがれる。ストリート・ミュージシャン・寺田恵子? 案外、ない話じゃないかもしれない。「海外へ行って『君、仕事は?』『まあ、ちよつと歌のほうを』『そりゃいい。なんでもいから歌ってくれよ』なんて酒場でリクエストされたりする。とりあえ

ず英語でだれでも知ってそうなバラードを一曲。ステージのように大受けはしないけど、その場に流れる空気が、歌でなにか変わるような気がするの。これっていいよなあ…って自分で思ってるや世話ないけど。大道芸人の人とかもいるでしょ。自分の好きなこと、自分のできることを、自分のためにやってる。だれにも迷惑をかけない『その人にあつたその人の生き方』だよ。そういう場面に出会うと、『なんだ、なんだあ〜?』(笑)って思わずお金をあげちゃう。あたしもSHOW-YAを始めたころは今よりうんとピンポーンだったしさ」

## SHOW-YAをやつて人生変わった? そんなこと、全然ないわよ。

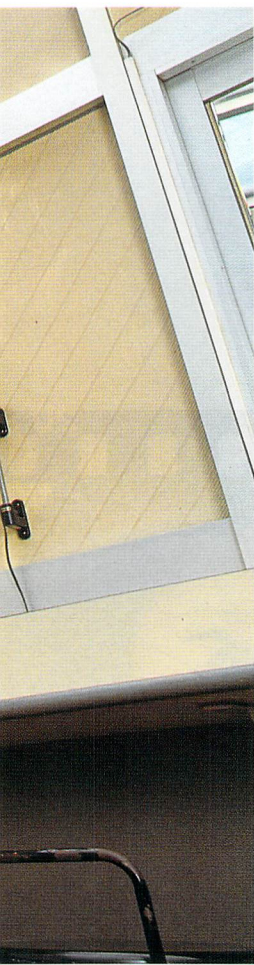
出現以来SHOW-YAは、いつも別格のバンドだった。寺田恵子(Vo)、中村美紀(Kb)、角田美喜(Dr)、仙波さとみ(B)、五十嵐美貴(G)の5人が打ち出すサウンドは、従来のガール・グループの枠を遥かに越えていたからだ。

アマチュア時代から「とんでもなくウマイ」と定評のあつた演奏力。「ロックをやる」ことに対する真剣な姿勢。強力なふたつの武器を手に、彼女たちはありがちなアイドル的要素にたよることなく、まっすぐに自分たちの音楽と取り組んだ。かっこだけのパンク・ブームや安直なメッセージ・ソングの氾濫のなかでも流されることなく、「ロックの王道」

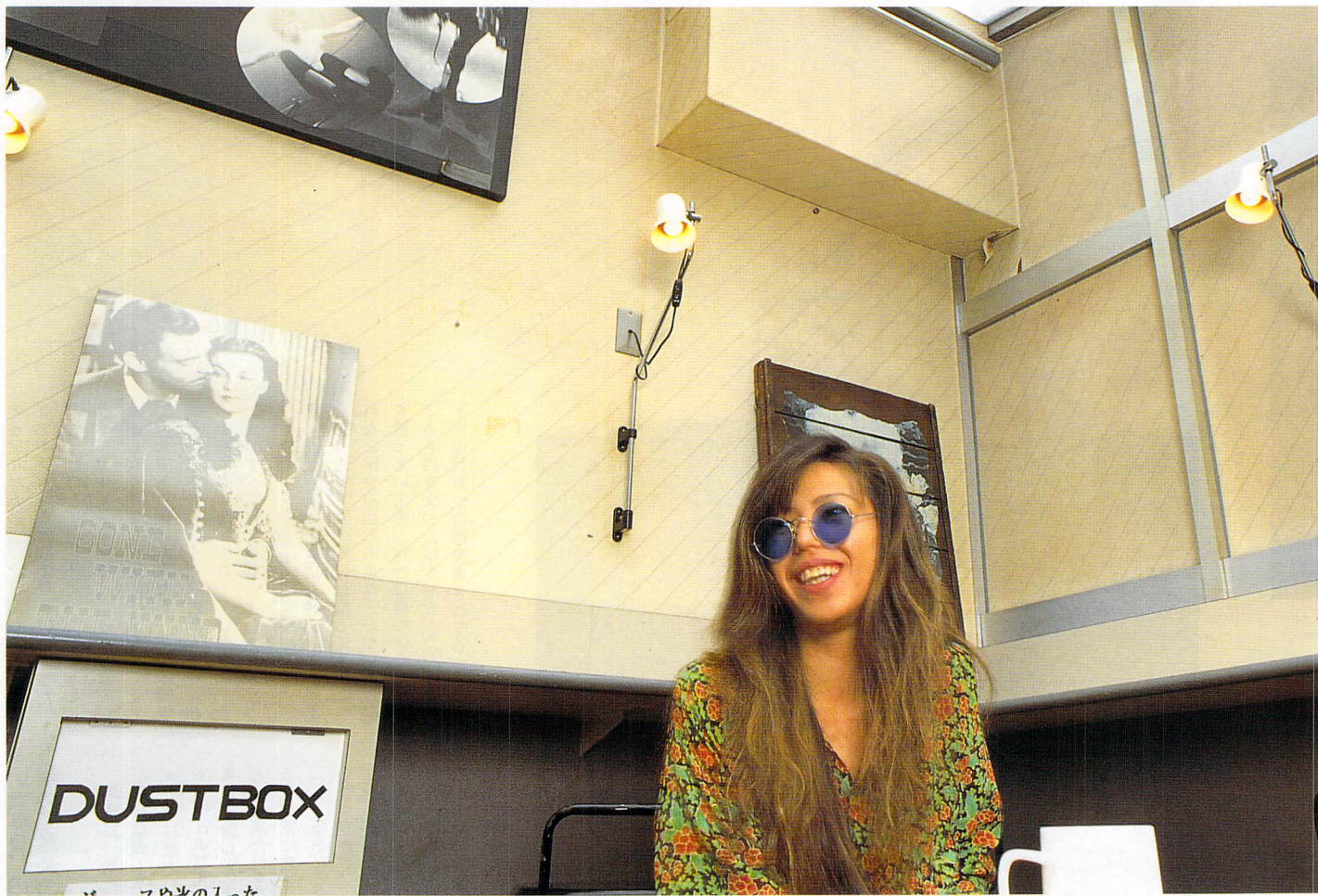
を歩み続けたという点でも、SHOW-YAは特筆すべきスケールの大きなバンドだった。

「SHOW-YAをやつたおかげで勉強はいっぱいしたけど、自分のなかにあるものは何も変わってないと思うの。音楽はやるべくして始めたというか、幼稚園時代から楽器でばかり遊んでいて『音楽関係に進ませるべきだ』って先生にも言われたみたいだし、自分自身も小学生のころから音楽をやつて決めてたしね。小学校3年でカルメン・マキの歌に出会って、何かあるたびにレコードと一緒に歌いくるってました。で、方法はわからないけど、とにかくデビューしなくちゃならない。高校生になると『もう、後がないゾ』なんて焦つてね。これは今だから言える最低の話だけど、SHOW-YAを始めて半年めくくらいに一人でオーディション受けたこともあるんだ。カーリーヘアにロンタイはいて、ただのアイドルぶりっ子じゃないよ…って格好で(笑)。見事に一次予選で落ちこちましたけど」

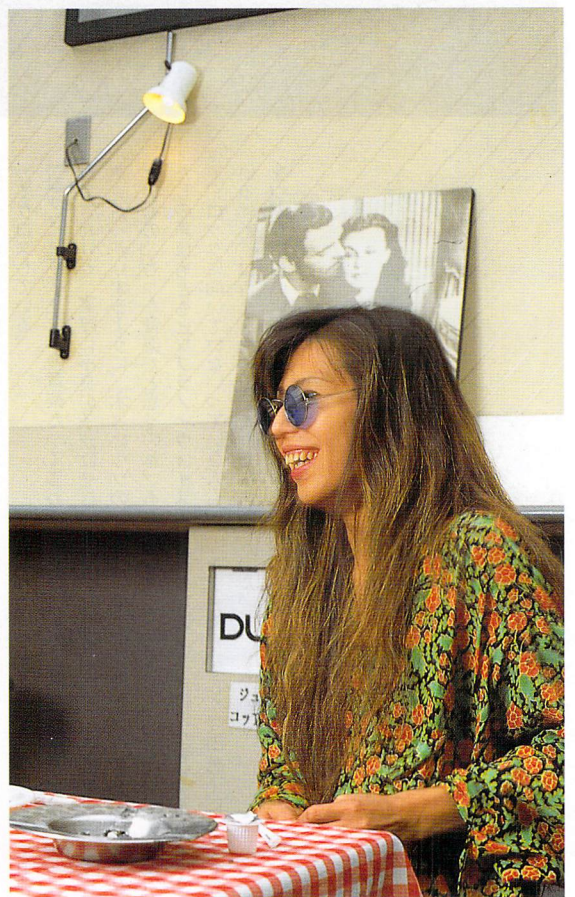
彼女の原点がカルメン・マキ(&OZ)にあるのは有名だ。日本のロックそのものがまだ十分に確立していなかった時代に、『フォークの女王』(時には母のない子のように)のメロディを、おかあさんに教えてもらおう)から一転してハード・ロックを始めたマキは、孤高の女性ロックカーとして70年代半ばのロックシーンに屹立している。20年来のあこがれだったマキを、寺田恵子はこの秋発表







男の人がバンドをやるとき、  
 いちばん最初の“不純な”動機に  
 「女のコにもてたい！」っていうのがあるじゃない（笑）。  
 女のミュージシャンには  
 そんなの、ひとりもない。



The  
 SPECIAL  
 Real  
 INTERVIEW  
 Face



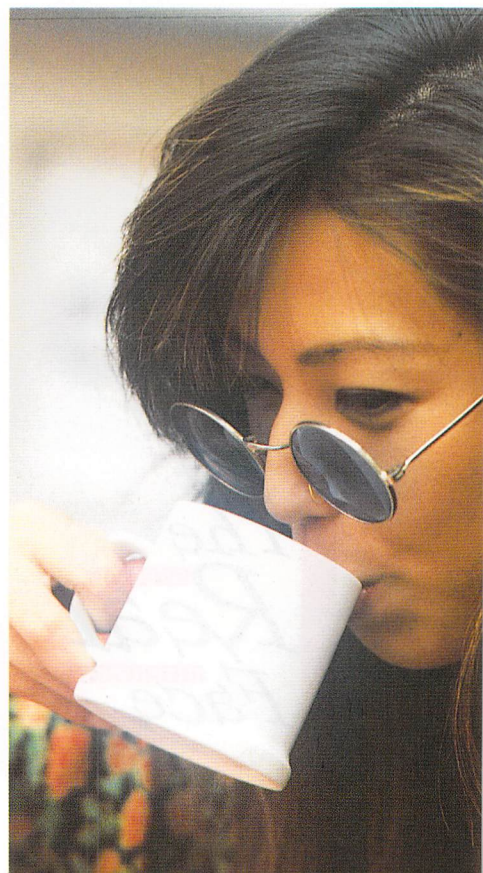


するアルバムのカヴァー（しかも、どのヴァージョンも元歌より長い）した。「ジャンス・ジョプリン、ベット・ミッドラー、カルメン・マキ……。みんな女でいながら女を捨てた部分で勝負して、それでも女であり続けた人たち。この系譜を継ぐのはあたしなんだ、と思ってる。根っから女性ヴォーカルって好きなの。女の人って、男に言わせるとしたたかだったというけど、全部声に出ちゃうでしょ。好きな人と話すときには勝手にトーンが高くなったり、女の声には隠しても隠しきれない部分があるのよね。だから同じ歌を歌っていても、何かに傷ついたたり、愛するものを失ったばかりだったり、そのときの状態が全部表現されてる」

### いきなり、のブー時代。 始めて音楽の偉大さがわかった。

時代は、常に動いている。寺田恵子がSHOW-YAから離れてもう4年。イカ天は終わり、地上に上がったバンド・ブームは再び地下に潜り、バンド少年が愛読した宝島は「VOW」単行本という皮だけを残した。だが、歌い続ける魂は常に残る。

「17のときからSHOW-YAを10年近くやってきて、（91年にやめたとき）いきなりなんにもしないブー太郎になっちゃったのよね。そうして離れてみると、音楽の偉大さっていうのが、ある種の宗教性みたいなものがよくわかった。あたしだけじゃなく、いろんなミュージシャン



の書いた言葉に誘発されて、『そうだがんばろう』とか『やっぱ、こんな世の中やダ』とか思う人がたくさんいるわけですよ。だから、あたし自身がウソのな自分生きて、そのうえで歌っていたいな……と気付いたワケですよ」

“ウソのない”という言葉が、彼女の話にはよく出てくる。華やかな印象とはうらはらに、禁欲的なまでに虚飾を廃した、むき出しの精神がそこには感じられる。そして、音楽のもつ宗教性という言葉は、己のなかの獣のもつ聖性といつだつてクロスしている。

「ロックは昔から不良の音楽だと言われてきたけど、実際に不良の子が話せば素直だったりするように、本当にウソのない心のこもった音楽だと思うのね。あたしの声はもともとソプラノ・ヴォイスで、ロックに向いていないっていう人もいますが、ロックをやるためだったら声をつぶしてもいいと思う」

みんなが斜に構えて通り抜け、粹にやり過ごしてしまふところを、愚直なまでに熱くストレートにぶつかっていく。寺田恵子の魅力が、そんな飼い馴らされなさにあるのもう間違いない。

「ソロになって1枚め、2枚めでは意識しないつもりでも、『SHOW-YAをひきずっちゃいけない』というプレキが働いて、あえてちがう路線を選んでみたい。だけど、あれ（SHOW-YA時代）もあたしなんだし、想像力で造った綺麗なものよりも、血や肉の感じられるほうが自分の身体には合ってるみたい」

方向性はもう十分に固まった。今は体の中が煮えたぎっているのよ、と彼女は笑う。カヴァー・アルバムを転機に、SHOW-YAのみならずカルメン・マキをも乗り越えた寺田恵子に、早く会いたい。



OMI

# 口紅下地用派 vs 口紅がいらぬ派

ナチュラルメイクに…

しっかりメイクに…

あなたはどっち？



ふだんからウソはないほうなんだけど、あんまり話がじょうずじゃないから、うまく伝えられないことがある。音楽をやっていると、自分でなくなる瞬間があつてすごいエネルギーを感じるね。



## PROFILE

### 寺田恵子

1963年7月27日生まれ、千葉市出身。高校1年のときにバンド活動を開始。85年、女性だけのロックグループSHOW-YAのヴォーカリストとしてデビュー。実力派女性グループとして脚光を浴び、海外で注目を集める。91年2月、方向性の相違からSHOW-YAを脱退。1年半の休養期間を経て、92年7月『PARADISE WIND』（バルセロナ・オリンピックNHKイメージソング）でソロ・デビュー。アルバム『BODY & SOUL』を発表。93年3月に2枚目のアルバム『INVISIBLE』、94年4月には3枚目の『Out of Breath』と精力的な活動を続けている。

The **SPECIAL** Real Face **INTERVIEW**

## 近江兄弟社 メンタム 薬用スティック



**ぬって実感!**  
口紅ノリが良くなってニジミや色ムラも解消！  
口紅下地の定番ブランド薬用リップ



**ぬってびっくり!**  
見た目は無色の薬用リップでも、ぬったとたんピンク色口紅代わりに使える魔法のような薬用リップ

株式会社 近江兄弟社